人生の最後

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生の最後

【Nコード】

N03090

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

年老いた人間がある日、ふらりと幻想郷に訪れた。彼は人生の最後に、何を見るのだろうか。

(前書き)

前書き

えーっと、この話はわかりやすく言つと短編の幻想入りです。
あんまり長くもなく、中身もないと思えますけど、まあ暇つぶし程
度にでも。

日本のどこかに住むとある老人は、今の自分の人生がもう終わりに近い事を覚っていた。

息子達は家族を持ち、孫達は元気に過ごし、伴侶は・・・もう先に行っている。

悔いのない、よくある人生。老人はただぼーっとその時を待っているようであった。

そんな日々のある日、老人が昔よく遊んでいた木をふと見ている内に、老人はその木をもう少し近くで見ようと近づいた。

その木に触れられるといった距離まで近づいた時、老人の足元にある隙間が現れたのだ。

老人は訳がわからないまま、幻想郷へと落ちていった。

場所は変わって、ここは幻想郷の地下の世界、地霊殿。

そこに住む妖怪、黒谷 ヤマメは、今日も変わらない日々を過ごしていた。

そんなヤマメの上から、先ほど隙間に落とされた老人が落ちてきた。一瞬対処に困ったヤマメだが、どうにか老人をその手で受け止めた。正確に言えば、蜘蛛特有の無数の手によってである。

ヤマメは抱きかかえた老人の顔を見ると、どうやら老人は意識を失っていたようであった。

更に対処に困る事態であったが、ヤマメはとりあえず老人を起こそうと呼びかけてみた。

「あのう・・・大丈夫？」

ヤマメの声が聞こえたのか、老人はゆつくりと自分の眼を開けた。老人が目を開けた時、老人は驚愕の表情になった。それも当然である。目を覚ましたら目の前にいきなり蜘蛛の姿をした妖怪がいたのであれば、驚いてしまうのが普通である。しかし、その老人は思った以上に驚く事はなかった。少し驚いたものの、表情はそのまま安堵の顔になっていった。老人が驚かなかった理由・・・それは、老人が子供の頃、このような姿をした者を見たからである。

そう確信した老人は、ヤマメに対して真相を尋ねた。

「君は・・・わしの事を覚えているかね？」

もちろん、ヤマメはこの老人の事など知るよしもない。ヤマメは不思議そうな顔で、老人の問いに返した。

「いえ・・・私は、あなたの事を知らないわ。」

そう言われた老人は、また違う勘違いをした。

「そうか・・・それもそうか。わしはあの時の姿とはまったく違うのだから、それも当然だね。」

勘違い調子の老人。そんな老人を見ている内に、ヤマメは話だけ合わせることにした。

「多分・・・そうね。」

ヤマメがそう返すと、老人がそろそろ降りたいと言った様子を見せ

たので、ヤマメはとりあえず抱きかかえたままの老人をゆっくりと降ろした。

降ろされた後で、老人が今自分がどこにいるのかわからなかったの
で、ヤマメに尋ねた。

「すまんが……ここはどこじゃ？」

「ここは……地霊って所よ。」

「ちれい？地霊とはなんじゃ？」

「えーっと……地上からずーっと地下にある所ね。」

「地下じゃと？ああ、なるほどなるほど、つまりここは、君の住処
か。」

「そうよ。」

「そうか。じゃあせっかくじゃから、そのちれいとやらを散歩させ
てもらってもよいかのう？」

「……多分いいと思う。」

「そうかそうか。それじゃ、案内をしてくれんか？」

「ええ、わかったわ。」

ヤマメがそう言うと、ヤマメはどこへなりと歩き出し、老人がその
後についていった。

少しして、老人の前に、地霊のあの町並みが見えてきた。幻想的で、賑やかな地霊の町に、老人は童心にでも返ったかのような気持ちになった。

「ほう、ここは今、祭りでもやっとなるのか？」

「いえ、地霊はいつでもこんな調子よ。」

「ほう、それは面白いのう。」

と老人が感心していると、あの星熊 勇儀が、どこからともなく老人の目の前に降りてきた。

「ん？人間がこんな所にいるだなんて・・・どうやって、ここまで来たんだい？」

勇儀の問いに対し、老人は答える前に尋ねてきた。

「おう？君は・・・鬼か？」

「ああ、そうだよ。ってその前に、あたしの質問に答えてくれないか？」

「ああ、そうじゃのう。」

と老人が冷静になって考えたが、よく考えれば老人がなぜここに来たのか、ろくに覚えていなかった。老人は素直に、勇儀にこう言った。

「すまんのう、なーんも覚えとらん。気がついたらおっこちとったんじゃ。」

「おっこちてたあ？ふくん・・・で、あんな高さから落ちて、よく無事だったねえ。」

「それは、この子がわしを受け止めてくれたからじゃよ。」
と老人は隣にいるヤマメに手をやった。

「ヤマメが？へえ・・・たまたま蜘蛛の巣にかかったのかい？」

「いえ、そうじゃないわよ。真上から落ちてきたから、それで受け止めたのよ。」

ヤマメがそう説明すると、勇儀がなぜか妙な高笑いを浮かべた。

「はっはっは、そうかい、まあいい。人間よ、あたしに会ったからには、勝負をしようじゃないか。」

と勇儀が言つと、いつもの流儀に従うように、片手に酒が入った大きな器を構えた。

「勝負？なんの勝負じゃ？」

「単純だよ。今あたしが持っているこの器から、一滴でも酒がこぼれれば、それであなたの勝ちだよ。」

「それじゃったら、わしの負けはなんじゃ？」

「知れた事・・・立てなくなった時だ!!」

「なるほどのう、鬼とはこんな性格をしとるのか。」

と老人が納得した様子を見せたが、ヤマメが止めにかかるように言ってきた。

「勇儀!?あなた、ただの人間に勝負を仕掛ける気なの!？」

「何を言ってるんだヤマメ、鬼と人ははるか昔っから、こうして勝負を繰り返してきたんだ。年老いてるとか、そんなは関係ないね!!」

と勇儀が言うと、納得した様子の老人が勇儀に問いかけてきた。

「聞いておくが・・・こぼした時点で、わしの勝ちじゃないか？」

「ああ、そつだよ。さあ、勝負をしようじゃないか、人間!!」

と言うが早いか、老人が老人とは思えない動きで、既に勇儀の間合いに入っていた。

「な!?早いね!!」

勇儀がとつさに、老人に開いている方の手で、力強いパンチを放った。

一瞬の出来事であった。パンチを放ったはずの勇儀が、いつの間にか老人の後ろに飛んでいた。いや、飛ばされていたのだ。

「え？」

何が起こったのか理解する間もなく、勇儀は地霊の家の二階辺りに突っ込んでいった。酒の入った器は当然地面に転がっていた。

勇儀が飛んでいった後、老人が地面に転がった器を確認した後で、勇儀の方に目を向けて言った。

「伊達に合気道はしとらん。この勝負、わしの勝ちでよいな？」

壁に張り付いたままの勇儀が、老人の問いに答えた。

「ああ・・・あなたの勝ちでいいよ・・・」

と言つと、勇儀はそのまま地面に落下していった。

戦いが終わった後で、傍観していたヤマメが、老人に話しかけてきた。

「すごい・・・あの勇儀を投げ飛ばすだなんて・・・」

「ま、これは年の功じゃ。」

そう言われたヤマメは、思わず笑みがこぼれた。

「ふふ・・・多分勇儀の方が、ずっと年上でしょうね。」

「そうか、それじゃ、若さの勝利じゃな。」

と語っていると、さっきまで老人であった体が、何の拍子もなく、若々しい青年の体へと変わっていたのだ。

その様子にヤマメが一番先に驚いた。

「え？えええ！？」

老人であった青年は、なぜヤマメが驚いているのかわからなかった
ので、当然尋ねてきた。

「どうしたんじゃ？わしの体が何かおかしいのか・・・」

と言いながら自分の手を見た。

しわなど一切ない、若々しい手を見た時、青年もヤマメのように驚
いた。

「な、なんじゃこれは！？これはわしの手なんか！？」

驚き調子であったが、しばらくして老人は適当な解釈をした。

「・・・ここは不思議な所じゃのう。まさかわしが若返ってしまっ
とは・・・」

そんな解釈をしている内に、地霊の町から続々と他の妖怪たちが現
れてきた。原因は負けた勇儀のようである。

「おい！！あの勇儀が人間に負けちまったぞ！！」

「しかもこいつ、いきなり若返りやがった！！」

「こいつもしかしたら、人間じゃねえんじゃねえか！？」

「どっちにしても、これはすごい事だよ！！」

「ようし人間、俺と勝負しろ!!」

「いや、私が先だ!!」

「何言つてやがる!!俺様が先だ!!」

と妖怪達が群れをなしてがやがやと騒いでいると、一人の妖怪がこんな事を口走った。

「ええい、こうなつたら今日は祭りだ!!」

その一声に、その場にいた全ての妖怪が一声に賛成の声を上げた。

「おおー!!」

一連の事についていけない青年とヤマメ。

しばらくぼーっとしていると、二人ともよくわからない妖怪にその手をつかまれてしまった。

「何ぼーっとしてやがる!!お前らが祭りの主役になれ!!」

二人はどうしようかと一瞬悩んだが、結局は流れに身を任せて、祭りの主役になっていった。

しばらくして、地霊にいる妖怪のほとんどが酔いつぶれる有様になつてしまった。

その中で、老人であつた青年とヤマメはどうにか酔いつぶれずにす

んでいたようである。

「いやあ、見た事もない所に来て、見た事もない者達とわいわい騒いで・・・人生の最後に、神様がわしにプレゼントしてくれたんかのう。」

青年はとりあえず、地霊での祭りを楽しんでいたようであった。

妖怪たちの有様を眺めていると、酔いつぶれる事だけは回避していたヤマメが青年に話しかけてきた。

「人間が来て、地霊がここまでの騒ぎになるだなんて・・・あなた、本当に人間なの？」

「わしがか？どうじゃろう、わしは今まで自分の事をずっと人間じやと思つとつた。いや、本音を言うたら、わしは今でも人間じやろうな。なんで若返つたのかはようかわらんが、それでもわしは人間じゃよ。」

自分の意思を明確に語るその姿に、ヤマメの心が少しだけ揺れた。その時を狙っていた訳ではないだろうが、青年がヤマメに駆け寄り、ヤマメの肩に手を置いた。

「もしかしたら、君がわしをここに導いてくれたのかもしれんものう。」

青年のその一言によって、ヤマメの心はさらに揺れた。

「そ・・・そんな事ないわよ・・・だって私は・・・あなたの事を・・・」

とはにかんだ調子で言っていると、この地霊の主、古明地 さとりが二人の元にゆっくりと歩いてきた。

「あらあら、地霊の妖怪達がここまで酔いつぶれているだなんて・
・人間はやはり侮れないわね。」

恐らくさとりは、自身の能力でこの状況を全て理解したようである。さとりがそう言った後で、青年を指差してまた言ってきた。

「あなた、悪いけどそろそろ帰ってもらおうよ。」

「へ？そんなんか？しっかし、どう帰ればいいんじゃ？」

「大丈夫よ、あなたがここにいる元凶は、今ここにいるから。」

さとりがそう言うと、さとりの後ろから、八雲 紫が隙間から現れた。

青年は一瞬驚いたが、妖怪達を散々見た為、もう慣れっこ状態になっているようだ。

「ふふふ、楽しめたかしら、この場所にただ一人だけの人間さん？」

紫がそう語りかけると、青年は饒舌に返した。

「・・・そうか、ここに連れてきたのは、君じゃったのか。てつきりこの子かと思うとったんじゃがのう・・・まあええか。とりあえず、わしの人生に華を添えてくれたのには、感謝しておくかのう。」

青年が一礼すると、紫は笑ってこう言った。

「そう、じゃあ、すぐにでもここを出るわよ。いいわね?」

紫の再確認を前に、青年に迷いはなかった。

「ああ。頼もつか。」

青年がそう言い、紫に駆け寄りうとうとすると、ヤマメが青年を止めるように腕をつかんだ。

「……なんじゃ?どうしたんじゃ?」

「……わからない……でも……このまま別れると思ったら……
……つい……」

ヤマメの中に芽生えていた感情。しかし、それはヤマメ自身ですらわかってはいなかったのだ。

青年は、長年の勘から、ヤマメの様子を察し、青年がとっさにポケットからある物を取り出してきた。

それをそのまま、ヤマメに差し出すように見せた。

「……これは?」

「お守りじゃよ。ずっとわしの事を守ってってくれとったお守りじゃ。もうわしにはいらんよ。この通り長生きしたからのう。じゃから、これからは君を守ってくれるじゃろう。」

「……ありがとう。私も、お返しに……」

と言うと、ヤマメも自分のポケット的な所から、とても綺麗な石を取り出し、それを青年に渡した。

「ほう、随分綺麗な石じゃのう。」

「私の、大切な石よ。生きている間だけでも、私の事を忘れないで。」

「安心せい、死んでもあの世で忘れんよ。」

青年は、もらった石を握り締めて、そう言った。

青年がそう言つと、今度こそ紫が最後の確認をしてきた。

「さて、それじゃ、いいわね?」

紫の再確認に、青年は黙つてうなずいた。

そして青年は、紫の隙間に飲み込まれていった。

青年、いや、老人が気がついた時には、老人が最初触ろうとしていた木の目の前にいた。

今まであった事が、まるで夢であったかのような今の状況。しかし、老人がそれまでの事が夢でない確信だけはあった。

そう、ヤマメから貰った石が、自分の手元で綺麗に輝いていたからであった。

(後書き)

後書き

どうですかみなさん。はしより具合はまあ勘弁してくださいな。

老人の口調はよくわからないので、とりあえずイメージでやりました。まあ大丈夫でしょう。

キャラの性格とかもよくわからないので、まあこんな形になりました。

最後まで読んでくださった方には、本当に感謝しています。

スペシャルサンクス

老人 様

黒谷 ヤマメ 様

星熊 勇儀 様

地霊の妖怪達

古明地 さとり 様

八雲 紫 様

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、真にありがとうございます。
ございました。

by 澄田 康美

PS、連載考えてたけど、無理だったので短編で勘弁してください
ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0309o/>

人生の最後

2010年10月21日23時07分発行